

## 心中（森鷗外）

お金きんがどの客にも一度はきつとする話であった。どうかして間違まちがって二度話し掛けて、その客に「ひゆうひゆうと云うのだらう」なんぞと、先を越して云われようものなら、お金の悔くやしがりようは一通りではない。なぜと云うに、あの女は一度来た客を忘れると云うことはないと云って、ひどく自分の記憶たのを恃たのんでいたからである。

それを客の方から頼たのんで二度話して貰もらったものは、恐らくは僕一人であろう。それは好く聞いて覚えて置いて、いつか書かこうと思おもったからである。

お金きんはあの頃いくつ位だったかしら。「おばさん、今晚は」なんと云うと、「まあ、あんまり可哀あはそうじゃありませんか」と真面目まじめに云って、救を求めるように一座を見渡したものだ。「おい、万年新造しんぞう」と云うと、「でも新造だけは難有ありがたいわねえ」と云って、心しんから嬉しいのを隠し切れなかつたようである。とにかく三十は慥たしかに越こえていた。

僕は思おもい出しても可お笑かしくなる。お金きんは妙な癖のある奴だった。妙な癖くせだとは思おもいながら、あいつのいないところで、その癖くせをはつきり思おもい浮かべて見ようとしても、どうも分わけらなかつた。しかし度々見るうちに、僕はとうとう覚えてしまった。お金きんを知しっている人は沢山あるが、こんな事をはつきり覚えてゐるのは、これも矢やつ張僕一人かも知れない。癖と云うのはこうである。

お金きんは客の前へ出ると、なんだか一寸ちよつと坐まわつても直ぐに又

立たなくてはならないと云うような、落ち着かない坐まわりようをする。それが随分長く坐まわつてゐる時でもそうである。そしてその客の親疎いとちによつて、「あなた大層お見限りで」とか、「どうなすつたの、鮑たうの道はひどいわ」とか云いながら、左の手で右の袂たもとを撮つまんで前に投げ出す。その手を吭のどの下に持つて行いつて襟えりを直す。直すかと思おもうと、その手を下へ引くのだが、その引きようが面白い。手が下まで下りて来る途中で、左の乳房ちのちを押おえるような運動うんどうをする。さて下りたかと思おもうと、その手が直ぐに又上あがって、手の甲うでが上になつて、鼻の下を右から左へ横よこに通とほり掛かかつて、途中で留とどまって、口を掩おほうような恰好かたごになる。手をこう云う位置ちに置いて、いつでも何かしゃべり続けるのである。尤もつとも乳房ちのちを押おえるような運動うんどうは、折々右の手てでもすることもある。その時は押おえられるのが右の乳房ちのちである。

僕はお金きんが話したままをそっくりここに書かこうと思おもう。頃日このころ僕の書かく物の総すべては、神聖なる評論壇ひんろんだんが、「上手な落語らくごのようだ」と云う紋切形もんきけいの一言ひとことで褒ほめてくれることになつてゐるが、若もし今度も同じマンシオン・オノレオノレエルを頂戴ていだいしたら、それをそっくりお金きんにお祝儀いわいぎに遣いれば好いいことになる。

\* \* \*

話は川柵かわさきと云う料理店での出来事である。但しこの料理店の名は遠慮えんりょして、わざと嘘うその名を書いたのだから、そのお積たかりに願ねがひたい。

そこで川柵かわさきには、この話のあつた頃、女中にようぢゆうが十四五人いた。

それが二十疊敷の二階に、目刺を並べたように寝ることになつていた。まだ七十近い先代の主人が生きていて、隠居為事にと云うわけでもあるまいが、毎朝五時が打つと二階へ上がつて来て、寝ている女中の布団を片端からまくって歩いた。朝起は勤勉の第一要件である。お爺いさんのする事は至つて殊勝なようであるが、女中達は一向敬服していなかった。そればかりではない。女中達はお爺いさんを、蔭で助兵衛爺さんと呼んでいた。これはお爺いさんが為めにする所あつて布団をまくるのだと思つて附けた渾名である。そしてそれが全くの冤罪でもなかつたらしい。

暮に押し詰まつて、毎晩のように忘年会の大一座があつて、女中達は目の廻るように忙しい頃のことであつた。或る晩例の目刺の一疋になつて寝ているお金、夜なかにふいと目を醒ました。外の女ならこんな時手水にでも起きるのだが、お金は小用の遠い性で、寒い晩でも十二時過ぎに手水に行つて寝ると、夜の明けるまで行かずに済みますのである。お金はぼんやりして、広間の真中に吊るしてある電灯を見ていた。女中達は皆好く寐ている様子で、所々で歯ざしりの音がする。

その晩は雪の夜であつた。寝る前に手水に行つた時には綿をちぎつたような、大きい雪が盛んに降つて、手水鉢の向うの南天と竹柏の木にだいぶ積つて、竹柏の木の方は飲み過ぎたお客のように、よろけて倒れそうになつていた。お金はまだ降っているかしらと思つて、耳を澄まして聞いているが、折々風がごとと鳴つて、庭木の枝に積もつた雪のなだれ落ちる音らしい音がする外には、只方々の戸がことと震うように鳴るばかりで、まだ降っているのだから、もう歇んでいるの

だか分からない。

暫くすると、お金の右隣に寝ている女中が、むっくり银杏返しの頭を擡げて、お金と目を見合わせた。お松と云つて、瘦せた、色の浅黒い、気丈な女で、年は十九だと云つているが、その頃二十五になつていたお金が、自分より精々二つ位しか若くはないと思つていたと云うのである。

「あら。お金さん。目が醒めているの。わたしだいぶ寐たようだわ。もう何時。」

「そうさね。わたしも目が醒めてから、まだ時計は聞かないが、二時頃だろうと思うわ。」

「そうでしょうねえ。わたし一時間は慥かに寐たようだから。寝る前程寒かないことね。」

「宵のうち寒かつたのは、雪が降り出す前だつたからだよ。降っている間は寒かないのさ。」

「そうかしら。どれ憚りに行つて来よう。お金さん付き合わなくて。」

「寒くないと云つたつて、矢つ張寝ている方が勝手だわ。」

「友達甲斐のない人ね。そんなら為方がないから一人で行くわ。」

お松は夜着の中から滑り出て、鬆んだ細帯を締め直しながら、梯子段の方へ歩き出した。二階の上がり口は長方形の間のお松やお金の寝ている方角と反対の方角に附いているので、二列に頭を衝き合せて寝ている大勢の間を、お松は通つて行かなくてはならない。

お松が電灯の下がっている下の処まで歩いて行つたとき、風がごとと鳴つて、だだだあと云う音がした。雪のなだれ落

ちた音である。多分庭の真ん中の立石の傍にある大きい松の木の雪が落ちたのだろう。お松は覚えず一寸立ち留まった。

この時突然お松の立っている処と、上がり口との中途あたりで、「お松さん、待って頂戴、一しよに行くから」と叫ぶように云った女中がある。

そう云う声と共に、むっくり島田髻を擡げたのは、新参のお花と云う、色の白い、髪の絨れた、おかめのような顔の、十六七の娘である。

「来るなら、早くおし。」お松は寝巻の顔を掻き合せながら一足進んで、お花の方へ向いた。

「わたしこわいから我慢しようかと思っていたんだけど、お松さんと一しよなら、矢つ張行つた方が好いわ。」こう云いながら、お花は半身起き上がり、ぐずぐずしている。

「早くおしよ。何をしているの。」

「わたし脱いで寝た足袋を穿いているの。」

「じれつたいねえ。」お松は足踏をした。

「もう穿けてよ。勘辨して頂戴、ね。」お花はしどけない風をして、お松に附いて梯子を降りて行つた。

便所は女中達の寝る二階からは、生憎遠い処にある。梯子を降りてから、長い、狭い廊下を通つて行く。その行き留まりにあるのである。廊下の横手には、お客を通す八畳の間が、両側に二つずつ並んでいてそのはずれの処と便所との間が、右の方は女竹が二三十本立っている下に、小さい石燈籠の据えてある小庭になつていて、左の方に茶室賽いの四畳半があるのである。

いつも夜なかに小用に行く女中は、竹のさらさらと摩れ合

う音をこわがったり、花崗石の石燈籠を、白い着物を着た人がしゃがんでいるように見えると云つてこわがったりする。或る時又用を足している間じゅう、四畳半の中で、女の泣いている声がしたので、帰りに障子を開けて見たが、人はいなかったと云つたものがある。これは友達をこわがらせる為めに、造り事を言つたのであるが、その話を聞いてからは、便所の行き返りに、とかく四畳半が気になつてならないのである。殊に可笑しいのは、その造り事を言つた当人が、それを言つてからは四畳半がこわくなつて、とうとう一度は四畳半の中で、本当に泣声が出たように思つて、便所の帰りに大声を出して人を呼んだことがあつたのである。

\* \* \*

お金は二人が小用に立つた跡で、今まで気の附かなかつた事に気が附いた。それはお花の空床の隣が矢張空床になつていることであつた。二つ並んで明いているので、目立つたのである。

そして、「ああお蝶さんがまだ寝ていないが、どうしたのだろう」と思った。お花の隣の空床の主はお蝶と云つて、今年の夏田舎から初奉公に出た、十七になる娘である。お蝶は下野の結城で機屋をして、困らずに暮しているもの一人娘であるが、婿を嫌つて逃げ出して来たと言ふことであつた。間もなく親元から連れ戻しに親類が出たが、強情を張つて帰らない。親類も川楸の店が、料理店ではあつても、堅い店だと云うことを呑み込んで、とうとう娘の身の上をこの内のお上さ

んに頼んで置いて帰ってしまった。それが帰ると、又間もなく親類だと云って、お蝶を尋ねて来た男がある。十八九ばかりの書生風の男で、浴帷ゆかたに小倉袴こくらばかまを穿かいて、麦藁帽子むぎわらぼうしを被かって来たのを、女中達が覗のぞいて見て、高麗蔵こま蔵のした「魔風恋風」の東吾とうごに似た書生さんだと云って騒さわいだ。それから寄つてたかつてお蝶を揶揄えげつたところが、おとなしいことはおとなしくても、意気地のある、張りの強いお蝶は、佐野と云うその書生さんの身の上を、さっぱりと友達に打ち明けた。佐野さんは親が坊さんにすると云って、例の殺生石せつしょうせきの伝説で名高い、源翁げんおう禅師を開基げんとして安穩寺あんおんじに預けて置くと、お蝶が見初みそめて、いろいろにして近附きんぞういて、最初は容易に聴かなかったのを納得させた。婿を嫌つたのは、佐野さんがあるからの事であった。安穩寺の住職は東京で新しい教育を受けた、物分りの好人なので、佐野さんの人柄を見て、うるさく品行を非難するような事をせず、「君は僧侶そうりよになる柄の人ではないから、今のうちに廃やし給え」と云って、寺を何かなしに逐おい出してしまった。そこで佐野さんは、内情を知らない親達が、住職の難癖なんへきを附けずに出家を止めるのを聞いて、げにもと思おもうらしいのに勢を得て、お蝶より先きに東京に出て、或る私立学校に這入はいった。お蝶が東京に出たのは、佐野さんの跡を慕もつて来たのであった。

佐野さんはその後、度々川柵へお蝶に逢いに来て、一寸話しては帰って行く。お客になつて来たことはない。お蝶の親元からも度々人が出て来る。婿取の話が矢張続ついているらしい。婿は機屋と取引上の関係のある男で、それをことわつては、機屋で困こるような事情があるらしい。佐野さんは、初

めはお蝶をなだめ賺すかすようにしてあしらっている様子であったが、段々深くお蝶に同情して来て、後にはお蝶と一しょになつて、機屋一家に對してどうしようか、こうしようかと相談をする立場になつたらしい。

こう云う入り組んだ事情のある女を、そのまま使っていると云うことは、川柵ではこれまでついぞなかった。それを目をねむつて使っているには、わけがある。一つはお蝶がひどくお上さんの氣に入っている為めである。田舎から出た娘のようではなく、何事にも好く氣が附いて、好く立ち働くので、お蝶はお客の褒めものになつている。国から来た親類には、随分やかましい事を言われる様子で、お蝶はいつも神妙に俯向うつむいて話を聞いていても、その人を帰した跡では、直ぐ何事もなかつたように弾力を回復して、元氣よく立ち働く。そしてその口の周圍には微笑の影さえ漂もっている。一体お蝶は主人に間違つたことで小言を言われても、友達に意地悪くいじめられても、その時は困つたような様子で、謹はんで聞きいている。それが決して人を馬鹿にしたような微笑ではない。伶俐れいりで何もかも分かつて、それで堪忍して、おこるの怨むのと云うこととはしないと云う微笑である。「あの、笑え靨くぼよりは、口の端はたの処たに、豎たにちよいとした皺しわが寄つて、それが本当に可哀あはうございしましたの」と、お金が云つた。僕はその時リオナルドオ・デア・キンチのかいたモンナ・リザの画を思い出した。お客に褒められ、友達の折合も好い、愛敬あいきやうのあるお蝶が、この内のお上さんに氣に入っているのは無理もない。

今一つ川柵でお蝶に非難を言うことの出来ないわけがある。

それは外の女中がいろいろの口実を拵えて暇を貰うのに、お蝶は一晩も外泊をしないばかりでなく、昼間も休んだことがない。佐野さんが来るのを傍輩がかれこれ云っても、これも生帳面に素話をして帰るに極まっている。どんな約束をしているか、どう云う中か分からないが、みだらな振舞をしないから、不行跡だと云うことは出来ない。これもお蝶の信用を固うする本になつていたのである。

お金は宵に大分遅くなつてから、佐野さんが来たのを知つている。外の女中も知つている。こんな事はこれまでもあつたが、女中達が先きに寝て、暫く立つてから目が醒めて見れば、いつもお蝶はちゃんと来て寝ていたのである。それが今夜は二時を過ぎたかと思うのに、まだ床に戻つていない。何と云う理由もなく、お金はそれが直ぐに氣になつた。どうも色になつている二人が逢つて話をしていのだと云う感じではなくて、何か變つた事でもありはしないかと氣遣われるような感じがしたのである。

\* \* \*

お花はお松の跡に附いて、「お松さん、そんなに急がないで下さいよ」と云いながら、一しよに梯子段を降りて、例の狭い、長い廊下に掛かつた。

二階から差している明りは廊下へ曲る角までしか届かない。それから先きは便所の前に、一燭ばかりの電灯が一つ附いているだけである。それが遠い、遠い向うにちよんぼり見えていて、却てそれが見えるために、途中の暗黒が暗黒として感

ぜられるようである。心理学者が「闇その物が見える」と云う場合に似た感じである。

「こわいわねえ」と、お花は自分の足の指が、先きに立って歩いているお松の踵に障るように、食つ附いて歩きながら云つた。

「笑談お言いでない。」お松も実は余り心丈夫でもなかつたが、半分は意地で強そうな返事をした。

二階では稀に一しきり強い風が吹き渡る時、その音が聞えるばかりであつたが、下に降りて見ると、その間にも絶えず庭の木立の戦ぐ音や、どこかの開き戸の蝶番の弛んだのが、風におおられて鳴る音がする。その間に一種特別な、ひゅうひゅうと、微かに長く引くような音がする。どこかの戸の間から風が吹き込む音でもあるだろうか。その断えては続く工合が、譬えば人がゆっくり息をするようである。

「お松さん。ちよいとお待ちよ。」お花はお松の袖を控えて、自分は足を止めた。

「なんだねえ。出し抜けに袖にぶら下がるのだもの。わたしびっくりしたわ。」お松もこうは云つたが、足を止めた。「あの、ひゅうひゅうと云うのはなんでしよう。」

「そうさねえ。梯子を降りた時から聞えてるわねえ。どこかここいらの隙間から風が吹き込むのだわ。」

二人は暫く耳を欬てて聞いていた。そしてお松がこう云つた。「なんでもあんまり遠いところじゃなくてよ。それに板の隙間では、あんな音はしまいと思うわ。なんでも障子の紙かなんかの破れた処から吹き込むようだねえ。あの手水場の高い処にある小窓の障子かも知れないわ。表の手水場のは硝子

戸だけれども、裏のは紙障子だわね。」

「そうでしょうか。いやあねえ。わたしもう手水なんか我慢して、二階へ帰って寝ようかしら。」

「馬鹿な事をお言いでない。わたしそんなお附合いなんか御免だわ。帰りたけりゃあ、花ちゃんひとりでお帰り。」

「ひとりではこわいから、そんなら一しよに行つてよ。」

二人は又歩き出した。一足歩くごとに、ひゅうひゅうと云う音が心持近くなるようである。障子の穴に当たる風の音だろうとは、二人共思っているが、なんとなく変な音だと云う感じが底にあつて、それがいつまでも消えない。

お花は息を屏めてお松の跡に附いて歩いていますが、頭に血が昇つて、自分の耳の中でいろいろな音がする。それでいて、ひゅうひゅうと云う音だけは矢張際立つて聞えるのである。お松も余り好い気持はしない。お花が陽にお松を力にしているように、お松も陰にはお花を力にしているのである。

便所が段々近くなって、電灯の小さい明りの照し出す範囲が段々広くなって来るのがせめてもの頼みである。

二人はとうとう四畳半の処まで来た。右手の壁は腰の辺から硝子戸になつていたので、始て外が見えた。石灯籠の笠には雪が五六寸もあるかと思う程積もつていて、竹は何本か雪に撓んで地に着きそうになつてゐる。今立っている竹は雪が墮ちた跡で、はね上がったのであろう。雪はもう降つていなかった。

二人は覚えず足を止めて、硝子戸の外を見て、それから顔を見合わせた。二人共相手の顔がひどく青いと思つた。電灯が小さいので、雪明りに負けているからである。

ひゅうひゅうと云う音は、この時これまでになく近く聞えている。

「それ御覧なさい。あの音は手水場でしているのだわ。」お松はこう云つたが、自分の声が不断と変つてゐるのに気が附いて、それと同時にぞつと寒けがした。

お花はこわくて物が言えないのか、黙つて合点々々をした。

二人は急いで用を足してしまつた。そして前に便所に這入る前に立ち留まつた処へ出て来ると、お松が又立ち留まつて、こう云つた。

「手水場の障子は破れていなかったのねえ。」

「そう。わたし見なかつたわ。それどこじゃないのですもの。さあ、こんなとこにいないで、早く行きましよう。」お花の声は震えている。

「まあ、ちよいとお待ちちよ。どうも変だわ。あの音をお聞き。手水場の中よりか、矢張この方が近く聞えるわ。わたしきつとこの四畳半の障子だと思ふの。ちよつと開けて見ようじゃないか。」お松はこん度常の声が出たので、自分ながら強く思つた。

「あら。およしなさいよ。」お花は慌てて、又お松の袖にしがみ附いた。

お松は袖を攫まえられながら、じつと耳を澄まして聞いている。直き傍のように聞えるかと思ふと、又そうでないようにもある。慥かに四畳半の中だと思われる時もあるが、又どうかすると便所の方角のようにも聞える。どうも聞き定めることが出来ない。

僕にお金が話す時、「どうしても方角がしっかり分からな

ったと云うのが不思議じゃありませんか」と云ったが、僕は格別不思議にも思わない。聴くと云うことは空間的感覚ではないからである。それを強いて空間的感覚にしようと思うと、ミュンステルベルヒのように内耳の迷路で方角を聞き定めるなどと云う無理な議論も出るのである。

お松は少し依怙地になつたのと、内々はお花のいるのを力にしているのとで、表面だけは強そうに見せている。

「わたし開けてよ」と云いさま、攫まえられた袖を払って、障子をさつと開けた。

廊下の硝子障子から差し込む雪明りで、微かではあるが、薄暗い廊下に慣れた目には、何もかも輪郭だけはつきり知れる。一目室内を見込むや否や、お松もお花も一しよに声を立てた。

お花はそのまま気絶したのを、お松は棄てて置いて、廊下をばたばたと母屋の方へ駈け出した。

\* \* \*

川柵の内では一人も残らず起きて、廊下の隅々の電灯まで附けて、主人と隠居とが大勢のもの騒ぐのを制しながら、四畳半に来て見た。直ぐに使を出したので、医師が来る。巡查が来る。続いて刑事係が来る。警察署長が来る。気絶しているお花を隣の明間へ抱えて行く。狭い、長い廊下に人が押し合つて、がやがやと罵る。非常な混雑であつた。

四畳半には鋭利な刃物で、気管を横に切られたお蝶が、まだ息が絶えずに倒れていた。ひゅうひゅうと云うのは、切ら

れた気管の疵口から呼吸をする音であつた。お蝶の傍には、佐野さんが自分の頸を深く刺つた、白鞘の短刀の柄を握つて死んでいた。頸動脈が断たれて、血が夥しく出ている。火鉢の火には灰が掛けて埋めてある。電灯には血の痕が附いている。佐野さんがお蝶の吭を切つてから、明りを消して置いて、自分が死んだのだらうと、刑事係が云つた。佐野さんの手で書いて連署した遺書が床の間に置いてあつて、その上に佐野さんの銀時計が文鎮にしてあつた。お蝶の名だけはお蝶が自筆で書いている。文面の概略はこうである。「今年の暮に機屋一家は破産しそうである。それはお蝶が親の詞に背いた為めである。お蝶が死んだら、債権者も過酷な手段は取るまい。佐野も東京には出て見たが、神経衰弱の為めに、学業の成績は面白くなく、それに親戚から長く学費を給してくれる見込みもないから、お蝶が切に願うに任せて、自分は甘んじて犠牲になる。」書いてある事は、ざつとこんな筋であつたそうだ。

川柵へ行く客には、お金が一人も残さず話すのだから、この話を知っている人は世間に沢山あるだらう。事によると、もう何かに書いて出した人があるかも知れない。